

## 【農業②】

# かづの農業の魅力を探求 ―花き園芸を通じて―

代表者 3A 木村 漢  
指導者 加賀 誠 幸

### I はじめに

農業による生産物（農産物）として、コメやコムギ、オオムギ、トウモロコシなどの「穀物」、牛や馬、豚、鶏などの「畜産物」、綿や麻、絹などの「繊維類」、野菜や果物、花きなどの「園芸作物」が挙げられる。

農業は総じて担い手不足、非効率な農地利用、農村の活力の低下といった厳しい状況に直面している。このような状況の中、国では農業を成長産業としてとらえ、10年間で農業・農村全体の所得を倍増させるという目標の実現に向け「農林水産業・地域の活力創造プラン（平成25年12月20日閣議決定）」を発表している。鹿角市においても平成27年に「鹿角市農業構造改革ビジョン」を策定し、米作や果樹、畜産の他に、『花き園芸』にも力を入れている。花き園芸は、園芸の一分野であり、野菜園芸・果樹園芸に対し、草花、サボテン、多肉植物、観葉植物、山野草、花木（かぼく）、盆栽などがある。

### II テーマ設定の理由

生徒が農業をイメージしたとき、米などの穀物、野菜・果物などの果樹、牛・豚・鶏などの畜産については馴染みがあるものの、『花き』については、あまり周知されていないようだった。そこで、花きの「草花」に焦点を当てることとし、花きの概況、主な生産・販売作物、管理の内容、経営の魅力や苦勞など農場での実体験や経営者等の講話などから花き園芸の魅力を理解することを通して本校ふるさと教育「かづの学」が掲げる目標の達成ができるのではないかと考えテーマを設定した。

### III 実施計画

- 1 オリエンテーション
- 2 農場の視察
- 3 農場経営者からの講話

- 4 県庁職員（花き担当）からの講話・協議
- 5 農場での実習（収穫作業等の体験）
- 6 花き園芸の状況調査（講義、協議）
- 7 学習の整理・発表へ向けての役割分担
- 8 発表会へ向けての資料作成等
- 9 発表会

### IV 調査・研究内容

#### 1 花き園芸を体験（農場視察等）

どのような環境下で花きが生産されているのか農場を視察するとともに実習も行った。今回、主に学習した「シンテッポウユリ」と「トルコギキョウ」は鹿角市の主力品種である。シンテッポウユリは、野外の畑で栽培され、草取りをはじめ、刈り取りや梱包作業等を体験した。また、トルコギキョウはハウスで栽培され、生育状況を観察したり刈り取り等を体験したりした。

#### 2 生産概況

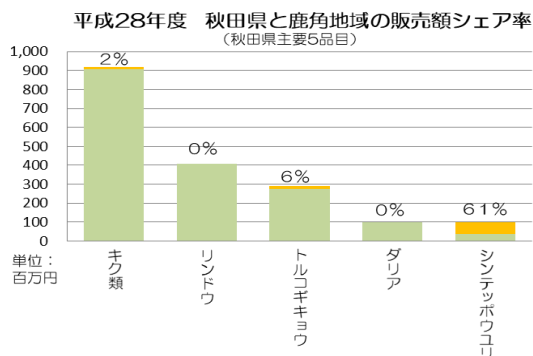
##### （1）鹿角地域の花き生産のあゆみと生産状況

- ①平成2年 鹿角地区花き生産者連絡協議会が鹿角市のハウスを活用してシンテッポウユリの育苗を開始する。
- ②平成4年 JAかづの花き生産部会が発足シンテッポウユリ、トルコギキョウを中心に作付け開始する。
- ③平成20年 シンテッポウユリが100万本出荷
- ④平成21年 花き部門生産額が1億円突破
- ⑤平成27年 冬期栽培を開始し鹿角地域で周年園芸体系を確立する。
- ⑥平成28年 雹被害で生産額が減少

##### （2）秋田県全体から見た鹿角地域の花き生産

鹿角市は、秋田県花き生産額の約5%を占め、その内「シンテッポウユリ」の生産額はシェア61%と全県1位である。また、ビニールハウス栽培も組み合わせ、他の花の生産額も向上してきている。更に冬期間栽培も開始し1年中栽培

するようになってきた。徐々に若手（20～30代）の生産者も増加していることが上げられる。



### (3) 主力品種「シンテッポウユリ」について

テッポウユリ類の都道府県別出荷額(生産額) H26年産：鹿児島県調査によると、1位鹿児島県(テッポウユリ)、2位高知県(テッポウユリ)、3位兵庫県(シンテッポウユリ)、4・5位に秋田県・長野県(シンテッポウユリ)が占めている。東北地方では1位である。なお、シンテッポウユリの出荷時期は主に7～10月となっており、お盆期間中の8月においては、東京都大田市場での出荷シェアは1位である。

### 3 産地の悩み

#### (1) 市場からの要望(シンテッポウユリ)

もっと安定的に量が欲しいという要望があるものの、出荷額・出荷本数が増加しない。要因として①切り花率の低下 ②連作障害 ③生産者の高齢化などが上げられる。

#### (2) 生産者の減少

一人当たりの耕作面積は増加している。また、若者の生産者も増えつつあるのだが、生産者の高齢化により生産を辞めてしまう人がいるため、減少傾向が続いている。

#### (3) 複合化が進む鹿角の花き生産

##### ①複合化によるメリット

- ・小面積でも生産性が上がる。(ハウスで2回付け)
- ・リスク分散できる。
- ・周年(年中)で花き生産ができる。

##### ②複合化によるデメリット

- ・シンテッポウユリの生産量が減少する。(全国市場からの要望に応えられない)

- ・花の種類によって使用する薬品、栽培方法が違うため、栽培管理が複雑になり品質低下を招く可能性がある。

- ・栽培する種類が多くなるとそれぞれの資材費が掛かる。

- ・栽培管理の技術や知識量も増える。

### 4 これからの鹿角の花づくりについて

鹿角市は、シンテッポウユリやトルコギキョウ等を主に花き生産を進めている。中でもシンテッポウユリは市場での需要が多いため、増産を進めていくことで「シンテッポウユリ=鹿角市」というブランドの確立を目指していくことも考えられるが、広大な土地の確保や管理が必要であり、切り花率や連作障害、生産者の減少と高齢化(特にユリの生産には体力が必要)などの課題がある。また、他の花きを増産する(複合化を進める)ことも考えられるが、その場合のメリットとデメリットのバランスも難しい。テッポウユリ類の増産を進めるのか、または複合化を進める方が良いのか、他の方法など、今後の戦略についての具体的な案は残念ながら出すことができなかった。生産者が高齢化し、減少してきている中でも市場ではニーズが高い品種があるため、将来の職業として花き生産者を志すこともひとつではないだろうか。因みに鹿角市の生産者(JA部会)は減少傾向であるものの、40歳以下の割合が平成24年9%に対して平成28年16%と増加してきている。いずれ生産を維持・増産するためには、一人当たりの耕作面積を増やし効率化を進めることは必要になってくると思われる。

### V おわりに

学習前は、店頭に並んでいたり諸会場等で飾られていたりするイメージであった「花き」であったが、農場での視察や体験、調査等から鹿角地区における花き園芸のあゆみや現在の状況、魅力や可能性についてなど、ふるさと「かづの」を学ぶことができた。今後もふるさとをより理解し、ふるさとの良さを発信するとともに、ふるさとに貢献できるよう努めていきたい。